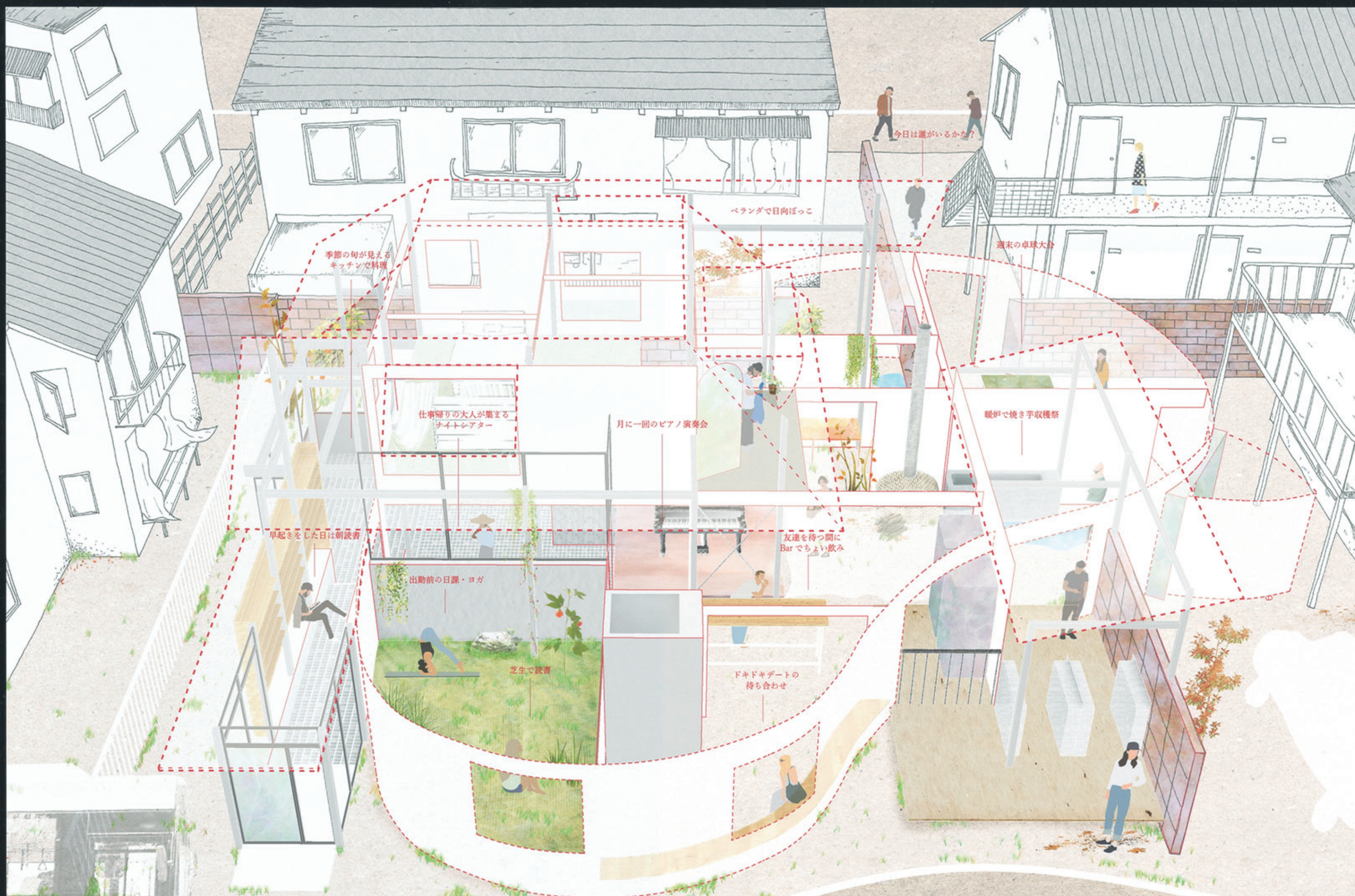




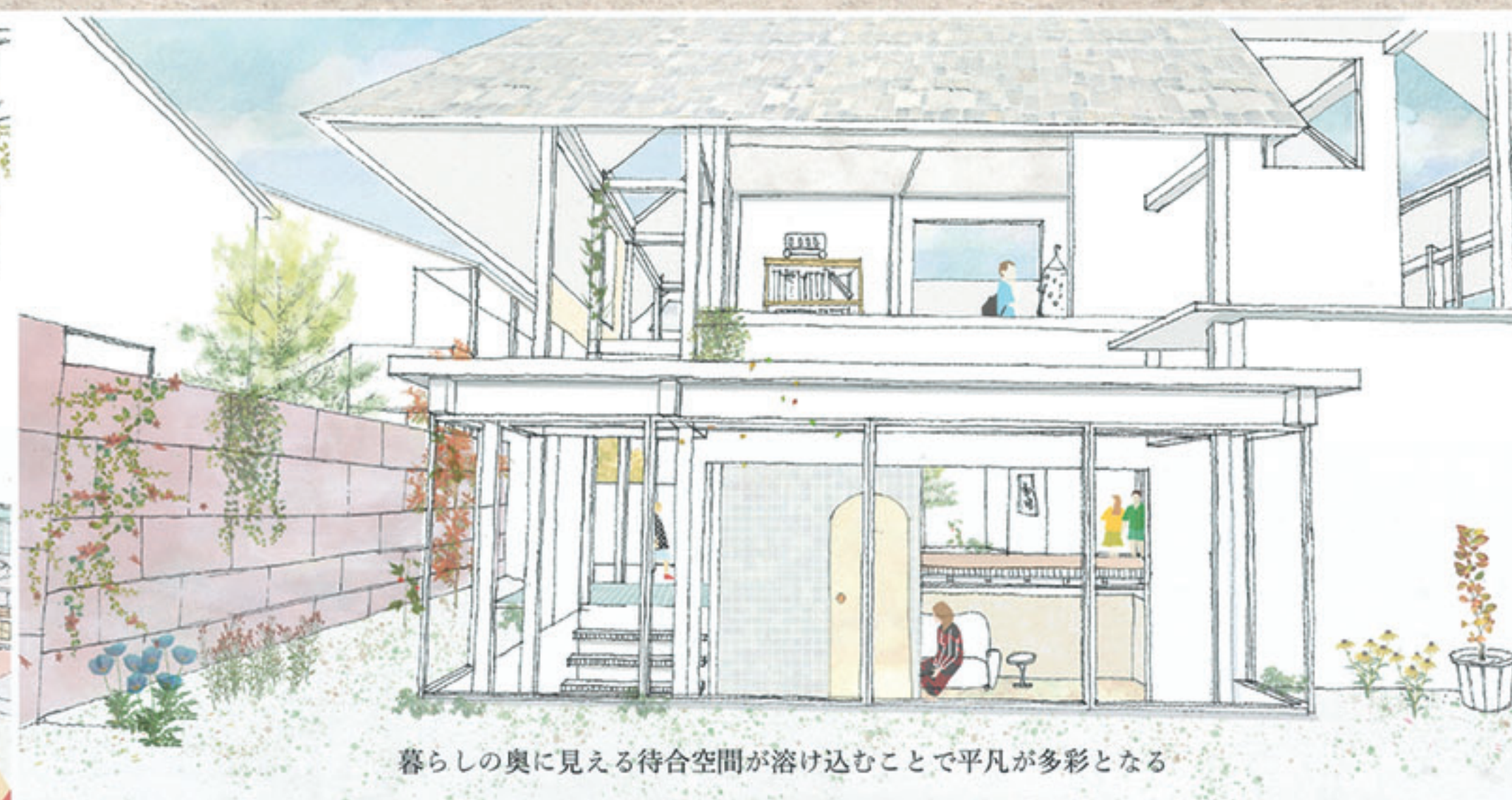
バス停のある家

住宅地での生活を支えるバス停の待合空間に快適さと待つ時間に付加価値を与える。

住宅地でのバス停を道の脇へと追いやるのではなく家の前がステーションという都市環境を用いた家の様なバス停、バス停の様な家を提案する。待つ行為を通して多様な待合部屋を家とバス停の相互に連節させることで敷地内での過ごし方の時間に個性が生まれる。このバス停を利用する家主、住民は並ぶことを止め思い思いの待ち方をする。緩やかに地域へと還元されていく「太っ腹さ」を兼ね備えている。

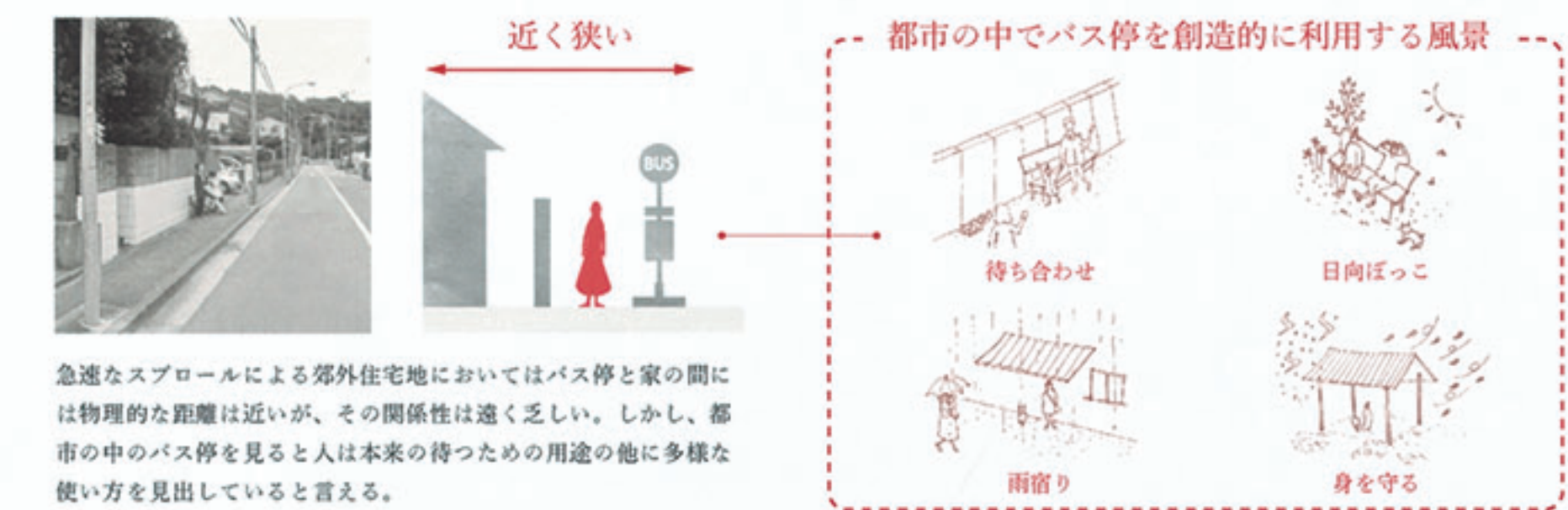


リビングのような待合空間が訪れた人の「待つ」行為を包容する



暮らしの奥に見える待合空間が溶け込むことで平凡が多彩となる

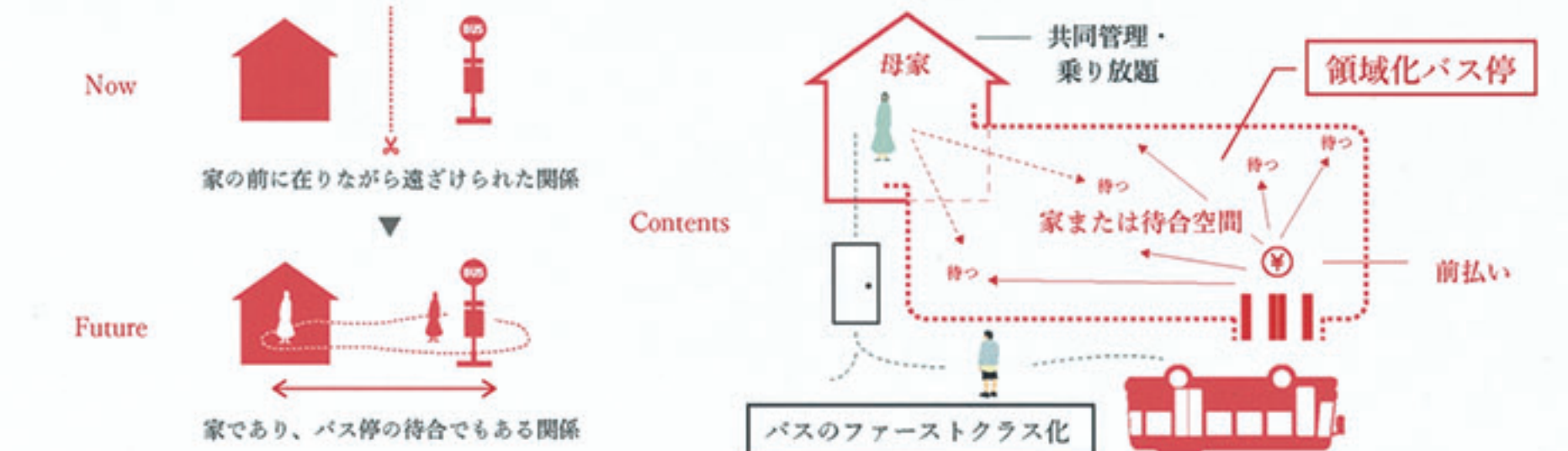
01 住宅街に垣間見るバス停と家の間



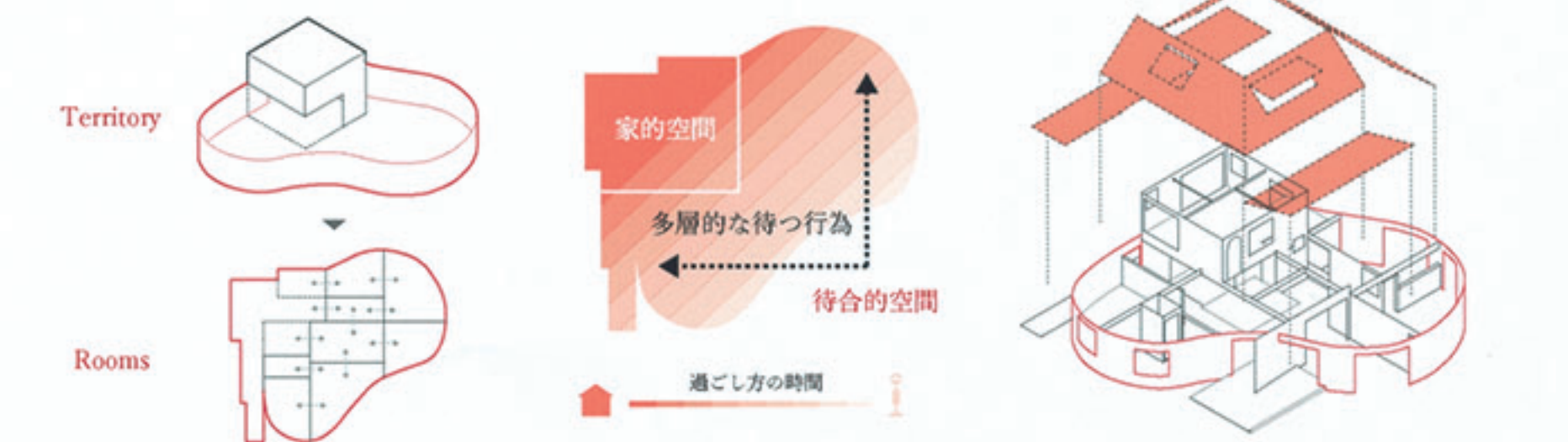
急速なスプロールによる郊外住宅地においてはバス停と家の間には物理的な距離は近いが、その関係性は遠く。しかし、都市の中のバス停を見ると人は本来の待つの用途の他に多様な使い方を生み出していると言える。

02 待合室の様な家、家の様な待合室

a. 家そのものをバスとの結節点に、バス停を我が家にする『太っ腹な家』



b. 多様な待ち方が部屋の集合となる



箱に取まらない多様な待合空間となる部屋の連続が家の外皮を破り領域化する。待つ行為を通して敷地には過ごし方の時間的なレイヤーができる。

屋根が複数の部屋に跨ることで領域を横断する。はみ出すことを許容する賢い家である。

03 部屋の連続が地域へと横断し始める



お隣の住民に待合空間が還元され待合領域が隣地境界線を越えていく

待合領域を隔てる壁に周辺とつながる仕掛けをつくる。壁が開き庭がつながり半所有化する。また木質アパートの共用廊下の突き当たり勝手口が生まれ新たな都市への玄関となる。バスを日常化するこの地域のコミュニティが小さなきっかけから根付育んでいくことを期待している。



sale=1:150